

# メディアセンターと研究業績調査の関わり

えんどう いずみ  
遠藤 泉

(信濃町メディアセンター)

## 1 はじめに

図書館の研究支援というと、資料の収集、組織化、保存、提供に関わるサポートがイメージしやすいだろう。さらに昨今では、電子ジャーナルの価格高騰への解決策としてオープンアクセス運動が始まり、その一環として機関リポジトリの構築に携わることによって、図書館が大学の研究成果の発信に関わることがより意識されるようになった<sup>1)</sup>。

大学では日常的に研究成果が生み出されるが、これらの研究業績は研究者個人の評価のみならず、世界的な大学評価のための各種ランキングの指標にもなる。本稿では、メディアセンターが研究業績調査に早くから関わってきた医学部および理工学部の過去の3つの事例を紹介するとともに、現在各メディアセンターが学内他部署や研究者個人から依頼を受ける研究業績調査について具体的な事例をまとめ、課題や今後の展望を述べる。

## 2 医学部・理工学部とメディアセンターによる研究業績管理・分析の過去の3事例

### (1) 医学部研究業績データベース

医学部では早くから研究業績情報を収集しており、その提供形式は冊子体からCD-ROM版、Web版へと移行した。冊子体は学内外に送付されていたが、発行部数が少なく認知度も低かった。信濃町メディアセンター（以下「信濃町」とする）が構築に関わり始めたCD-ROM版は1995年に初めて作成されたが、ソフトウェアライセンスの事情により、当初は学内限定の公開であった。2000年にWeb版に移行してからは学外への情報提供が可能になり<sup>2)</sup>、2003年には慶應義塾研究者データベース（K-RIS<sup>3)</sup>）に集約されたため、医学部独自の業績データベースの構築はこれにて終了した。

### (2) ResearcherID<sup>4)</sup>の登録サポート

ResearcherIDは2008年にスタートしたトムソン・ロイター社による研究者ディレクトリで、研究者自

らがID登録し<sup>5)</sup>、My Publications（2013年当時はPublication List）と呼ばれる業績リストを作成できるサービスである。慶應義塾大学は2013年に文部科学省の定める研究大学強化促進事業の支援対象機関となり<sup>6)</sup>、ResearcherIDの登録作業を促進する動きをスタートさせた。まず医学研究科において登録作業が始まり、信濃町が登録手順マニュアルをもとに、医学研究科委員会で説明を行い、教員からの問い合わせに応じた。また2014年には、登録作業に携わる医局秘書向けにセミナーを行った。

一方で慶應義塾大学は2016年にORCID（Open Researcher and Contributor ID）のメンバーシップを取得し、ORCIDとK-RISの連携を進めている<sup>7)</sup>。2019年にはResearcherIDのサイトは後継サービスPublons<sup>8)</sup>に移行し、ResearcherIDとORCIDとの連携が容易になった。

### (3) 理工学部の研究分析

2010年代前半には、理工学メディアセンター（以下「理工」とする）と研究戦略に関わる教員とのプロジェクトとして、理工学部の研究分析を行った。このときに使用したツールはエルゼビア社のSciVal Spotlightとトムソン・ロイター社のInCites Research Performance Profileである。前者では慶應における「102の強み領域」から、さらなるキラー研究の抽出、医学部および慶應義塾大学病院との医工連携研究といった学際的研究、国際共同研究の調査と分析を行った。後者では理工学部の研究者50名の研究状況を把握し、その後、医学部の教授、准教授についても、理工学部との連携の可能性を調査した<sup>9)</sup>。

## 3 現在の各キャンパスにおける研究業績調査

ここからは、現在各メディアセンターにおいて、どのような業績調査を行っているかを紹介する。なお、ここで扱う紹介事例は、傾向として前項で述べた研究業績データベースの構築や学部独自のプロジェクトの一環としての分析というよりは、大学全

## 特集 学術コミュニケーションを支える：研究・教育活動に参画するメディアセンター

体の動向調査や、学内の学術研究支援部門（以下「学研」とする）からの依頼に基づく投稿誌の調査や、学生課から依頼される教員採用候補者の調査、研究者個人から依頼される業績調査も含まれる。

### (1) 国際共著率調査

学研本部から三田メディアセンター（以下「三田」とする）へ依頼される年に一度の調査で、2019年より始まった。経常費補助金調査の一項目として、慶應全体の論文生産数における国際共著論文の比率調査である。文献データベース（以下「DB」とする）はWeb of Science（以下「WoS」とする）等を使って集計する。

### (2) 国際論文掲載料補助調査

学研本部から三田へ依頼される年に4回程度の調査で、2019年より始まった。国際学術論文掲載料補助制度<sup>10)</sup>に申請された論文の投稿先に対する信頼性調査等が含まれる。主にWoSとJournal Citation Reports（以下「JCR」とする）を用いて調査している。

### (3) 研究大学フォローアップ調査

学研本部から三田へ年に一度依頼される、研究大学強化促進事業のフォローアップ調査への回答を目的とした調査である。SciVal<sup>11)</sup>を用い、国際共著論文率、産学共著論文率、Top10%論文率（出版年別の論文中、被引用数が全体の上位10%に含まれる論文率）を調査する。

### (4) 医学部見える化プロジェクト

医学部企画室から信濃町へ依頼される不規則の調査で、2018年より調査項目の選定や分析の検討が始まり、これまでに2019年、2021年の二度の調査があった。SciValを用いて各教室（基礎医学系の教室はさらに細分化した研究室）ごとの文献数、被引用数、Top10%論文率、h-index<sup>12)</sup>を調査する。

### (5) 基礎研究医プログラム届出のための調査

卒後臨床研修センターより信濃町へ依頼される年に一度の調査で、2020年より始まった。東京都に提出する調査で、過去3年間において「筆頭著者が発表当時に慶應（医学部・病院）所属である」、「基礎

医学分野の原著論文である」、「5年平均のジャーナルインパクトファクター<sup>13)</sup>（以下「IF」とする）が15以上」という条件に合う文献を、WoSとJCRを用いて調査する。

### (6) Keio Research Highlights<sup>14)</sup> 掲載候補記事選定のための調査

理工学部にて、時期は不定期であるが、2015年頃からおよそ年1回依頼される。目的はKeio Research Highlights掲載候補記事選定のための調査である。学部長や学研本部が依頼元だが、理工学部の学術研究支援課が窓口となり理工に依頼される。近年の調査はSciValを使って、論文数、被引用数、一論文あたりの被引用数、FWCI（Field-Weighted Citation Impact）<sup>15)</sup>、h-indexを学部全体・学科別・研究者別に抽出しデータを提出している。

### (7) SFC論文掲載料補助のための調査

湘南藤沢キャンパスの学研より、湘南藤沢メディアセンター（以下「湘南藤沢」とする）へ依頼される調査で、2021年度に新設の「SFC論文掲載料補助」審査のための調査である。年に数回依頼があり、対象論文の掲載誌が「国際的影響力のある国際学術論文誌」であるかを、JCRを用いIFを確認する。

### (8) 教員採用候補者の調査

医学部や看護医療学部にて、学生課等の事務室より依頼される。医学部では年に何度も調査依頼が来ることもある。教員採用の判断材料の一つとするための調査で、主にWoSを使って検索し、依頼内容に応じて文献数（筆頭著者や責任著者の指定あり）、被引用数、IF、h-indexを抽出し、EndNoteを使ってリスト化し提出している。

### (9) その他研究者個人から依頼される調査

信濃町では本学の医学部卒業生からの業績調査依頼や、学内の研究者個人からの依頼にも応じている。調査目的は自身の業績調査や、学生課を経由せずに採用候補者を比較するための調査である。基本的にはWoSを用いるが、依頼者のリクエストに応じてScopusを用いることもある。

看護医療学図書室では、これまで述べた定期・不規則の調査とは別のタイプではあるが、看護医療学

部の国際交流委員長より依頼があり、学部としての学術上の海外交流（投稿）のための基礎情報として、WoSやPubMed, CINAHLで著者所属に看護医療学部や前身の短期大学等を含むものを検索し、出版年ごとの論文件数のグラフと論文リスト、被引用数を調査した。

薬学メディアセンターにおいても、研究者個人から依頼があり、自身の研究テーマについての国別動向を調べたいとの相談があった。成果物としての提出はしていないが、SciValで国別の文献数変遷のグラフを例示し、補足的にScopusの機能も案内した。

#### 4 研究業績調査の課題

以上の事例紹介では、三田では主として慶應全体の研究業績調査を行っており、大学評価につながる指標として国際的な共著論文や産学連携の論文調査を担っていることを紹介した。湘南藤沢では論文掲載料補助制度に関連し対象誌のIFを調査し、信濃町と理工ではそれぞれ医学部、理工学部全体の研究者の業績調査が定期的に行われている。教員採用のための調査は信濃町でほぼ日常的に行われ、またそのほかのキャンパスのメディアセンターでも、個人からの依頼により論文そのものの被引用数や投稿誌のIF、研究者の評価指標としてのh-index等の指標を算出するサポートを行っている。

これらの指標はWoS, Scopus, SciVal等のツールを駆使することで一定程度算出することができるが、求められている値のすべてを自動的に抽出することは難しく、人手による作業も必要である。例えば「年」ベースではなく「年度」ベースでの調査が求められる場合、SciValではデータが出しにくいケースがあった。また論文が正式な出版前の場合には出版年月データがDBに含まれないため、手作業でデータを確認する必要がある。さらに、例えば「基礎医学分野の文献」といった分野を限定されている調査では、どのように分野を絞り込んでいくかといったところで判断に苦しむことがあり、基礎医学と臨床医学の境界があいまいな領域では特に線引きが難しい。

また、用いるDBの契約状況によっては、今後利用できなくなるツールもある。特にSciValは、現在の研究業績調査において非常に重要度の高いツールであるが、2022年度をもって契約終了となる。評価項目を設定する際にSciValありきで手順を定めてい

る業績調査の場合、契約終了後は現在の項目の抽出が難しくなる可能性がある。別のツールを使って類似の評価項目を算出できたとしても、過去のデータとの比較は難しくなるであろう。

抽出できる項目や数値は契約DBに依存しているため、WoSやScopusにおいて著者の同定などがうまく機能しない場合は、データ不備が発生する可能性がある。いかなる調査も目検などの人手による作業は少なからず発生し、その使用目的から間違いが許されない調査のため、複数のスタッフによる慎重な確認作業を要する。そのため提出期日に余裕をもって依頼することをお願いしているが、依頼側が研究業績調査についての知識が乏しく、「これくらいはDBを使えば簡単にできる」と判断されてしまい、期日まで余裕のない依頼や、いささか情報過多と思われる評価指標を「とりあえず依頼」されている印象を受けることもある。本当にその指標が必要なのか、本来得べき情報は何かをより詳しく依頼元にインタビューする必要がある。

#### 5 これからの研究業績調査

研究業績調査の多くは学内の他部署から依頼されるものであるため、とりわけ各キャンパスの学研との直接の情報交換や連携を深める必要がある。学研にはリサーチ・アドミニストレーター（URA）が存在するものの、メディアセンターのスタッフが研究支援についてURAと情報交換することはほとんどない。図書館員は分析ツールを使いこなすことはできても、どの場面でどのように研究業績データが必要とされているのかといった情報が得られていないことが多く、基本的には依頼に応えるだけで、研究業績データの活用面において積極的に働きかけていないのが現状である。学研本部と三田では定期的な情報共有の場が確保されているものの、他のキャンパスでの組織連携は残念ながらかなり希薄である。

またメディアセンターと研究業績調査との関わりも、各キャンパスで差がある。そもそも需要がないのか、メディアセンターが研究者サポートの一環として研究業績調査を行っていることを、他部署や研究者が認識していないのかは分からないが、まずは我々から、業績調査の需要の有無を確認するところからスタートしてみたい。

メディアセンターではサービスのオンライン化が

## 特集 学術コミュニケーションを支える：研究・教育活動に参画するメディアセンター

進み、利用者は来館しなくても一定のサービスが受けられるようになった。一方で、図書館員が研究者と顔を合わせ、時間をかけて研究に関する話を聞く機会はぐんと減った。その結果それらの研究が、どの程度社会にインパクトをもたらしていくのかをイメージすることが難しくなってしまった。各キャンパスに所属する研究者たちの研究動向を把握するには、DBや分析ツールを使い研究業績を分析することが有効である。図書館員が各種ツールを駆使し生み出した分析に価値と需要があれば、学研をはじめとした学内他部署や研究者等に提供することで、さらなる研究者サポートの充実を図れるのである。各種ツールへの理解や習熟度を深めるとともに、学内の研究活動やその業績、ひいては大学全体に対する評価を常に意識していきたい。

### 注・参考文献

- 1) 市古みどり. 大学図書館による研究支援の可能性. 情報の科学と技術. 2016, vol. 66, no. 2, p. 67-71.
- 2) 川崎直子. 慶應義塾大学医学部研究業績データベース：大学図書館の研究支援活動の一環として. 医学図書館. 2003, vol. 50, no. 2, p. 131-136.
- 3) 慶應義塾. “慶應義塾研究者情報データベース (K-RIS)”. <https://www.k-ris.keio.ac.jp/>, (参照 2022-07-11).
- 4) Clarivate Analytics. “Welcome to the new Web of Science ResearcherID”. <https://www.researcherid.com/#rid-for-researchers>, (accessed 2022-07-19).
- 5) 蔵川圭. Web上に公開される著者のデータベースと識別子. 情報の科学と技術. 2011, vol. 61, no. 11, p. 447-452.
- 6) 文部科学省. “平成25年度「研究大学強化促進事業」の支援対象機関の決定について”. [https://www.mext.go.jp/a\\_menu/kagaku/sokushinhi/1338460.htm](https://www.mext.go.jp/a_menu/kagaku/sokushinhi/1338460.htm), (参照 2022-7-19).
- 7) 慶應義塾大学メディアセンター. “オープンアクセス論文を探す・公開する：ORCIDとは”. <https://libguides.lib.keio.ac.jp/oa/orcid>, (参照 2022-07-19).
- 8) Clarivate Analytics. “Publons”. <https://publons.com/wos-op/about/home/>, (accessed 2022-07-19).
- 9) 市古みどり. 研究支援と大学図書館 (員). MediaNet, 2013, no. 20, p. 25-28.
- 10) 慶應義塾大学. “慶應義塾大学研究推進支援ポータルサイト：塾内研究費・助成制度”. <https://www.research.keio.ac.jp/internal/int/index.html#contents6>, (参照 2022-07-14).
- 11) Elsevier. “SciVal”. <https://www.scival.com/home>, (accessed 2022-07-19).
- 12) その論文集合の中で、h回以上引用された論文がh件あるときの最大の「h」を指す。研究者のその分野における貢献度の指標である。なおSciValではh-indicesと表記される。
- 13) クラリベイト・アナリティクス社が算定する指標で、特定の1年間において、特定の雑誌に過去2年間に掲載された論文が平均的にどれくらい頻繁に引用されているかを表す尺度。学術誌の影響度を表し、同分野の他の雑誌と、重要度を相対的に比較できる。
- 14) Keio University. “Keio Research Highlights”. <https://research-highlights.keio.ac.jp/>, (accessed 2022-07-11).
- 15) エルゼビア社が提供する論文のインパクトを示す評価指標で、類似の論文（同じ分野、出版年、文献タイプ）と比較してどの程度引用されたかを示す指標である。